第17回奈良県河川整備委員会議事概要

１.日　時：平成15年 6月 5日(木)　13:00～16:30
２.場　所：奈良県新公会堂　２Ｆ会議室
３.出席者：委　員　池淵周一、伊藤章子、近江昌司、荻野芳彦、北口照美、木村優、
　　御勢久右衛門、榊原和彦、澤井健二　　(順不同･敬称略)
　　奈良県　森脇土木部次長、竹島河川課長、入口係長　ほか
４.議　事
(1)「第15回奈良県河川整備委員会の議事概要の確認」について
●事務局より、第15回委員会議事概要の説明
各委員により了承された。
第16回委員会は「現地視察」とすることを説明
各委員により了承された。

(2)「奈良県の管理する河川のめざすべき方向(大和川水系)」について
●河川管理者よりこれまでに提示した「めざすべき方向」について、主に総合的な治水対策の効果の修正案を説明
【意見交換】
・昭和57年8月洪水の実績流量は1,990m3/sとあるが、この値の根拠とこの雨の確率規模はどのくらいか。
→実際のデータとしては1,400m3/s強程度である。1,990m3/sは氾濫がおこらなかったと仮定したときの藤井地点での想定流量である。本川がうけもつ1,700m3/s(藤井地点)については、流域全体で見て概ね1/30程度と評価される。(河川管理者)
・亀の瀬の1,700m3/sと支川の10年確率流量との関係はどのようになっているのか。
→支川毎に計画する場合と流域全体でみる場合で雨の降り方が若干違う。雨の統計の取り方で確率が変わってくる。1,700m3/s(藤井地点)は流域全体で見て1/30と評価している。(河川管理者)
・一般的に流下型と貯留型の割合はどうなっているか。今後は流下型の割合を減らし貯留型対策を進めていくべきではないか。
→全国的に貯留型の割合は小さい。(河川管理者)
・各戸貯留を増やせばどうか。上流の森林保全や農地の保水効果も考えればどうか。
・若干の浸水は災害ではないという浸水を許容する治水を考えたらどうか。
・この計画は整備が終わるまでの20年間は我慢しなさいということを裏では言っている。また、奈良県は10年確率だが、他府県では大体50年確率とか100年確率で整備しているのではないか。そういうことをきっちりと説明してｺﾝｾﾝｻｽを得るという姿勢が要るのではないか。
・水というものは循環しており、みんなのものである。身近な池などに棲む魚や草木、水の量などが減っていることなどが、水に対する住民の意識が薄れている原因ではないか。まずは子供達に対し環境学習を通した意識付けをおこなうことが重要。
・奈良県あるいは大和川らしい治水計画は、貯留型に代表されるのではないか。小さな各戸貯留であっても、数が揃えばダムに匹敵する容量が得られる。土地利用についても浸水実績図や浸水想定区域図を公表し、都市計画に反映させれば被害も減るはず。
・吉野川分水が計画されるまでは池がたくさんあった。農林部局などの関係部局とも調整し土地利用も含めた総合的な検討が必要。
・「万葉の清流を復活し」とあるが、水が汚くなったから遷都したはず。「裸足で入れるような」川という表現の方が分かりやすいのではないか。
・「自然と共生した快適な水辺空間」だが、「快適な」水辺空間というのは人間の側から見た話で、「自然と共生」とはどうも矛盾しているのではないか。何か人々におもねっているような感じもする。

・美しい風景、本物の風景をつくる。世界遺産の街、都市。地域にふさわしい風景をつくることが必要ではないか。世界遺産に匹敵するような文化を我々だって生み出したらいいのではないか。表現としては、「自然と共生した水辺空間と美しい風景」ということになるのではないか。

●河川管理者より布留飛鳥圏域の概要を説明
●事務局より第16回奈良県河川整備委員会(現場視察)の状況報告
【意見交換】(主に第16回奈良県河川整備委員会(現場視察)について)
・環境整備施設などがあったが、いずれも関係部局との連携が十分に図られていない。
・奈良らしさを、一つは地形水文学的な条件で貯めないといけないこと、もう一つは文化人類学的に万葉の郷であり歴史的な資産の宝庫であるということ。それに合う風格のある川づくりができていない。歴史を感じさせない。川は河川管理者だけの川ではない。
・石に見せかけた橋があったが、ああいう石を積んでもあの橋はつくれない。構造的にあり得ない。二重三重に偽物で、どうしようもないデザインとしか言いようがない。
・河川を直線化するとどれも同じ風景になる。旧河道を利用した河川公園も水が見えないし特色がない。自然の流れの形を生かしてデザインしていかないといけないのではないか。立ち止まって川を見たり、川から３６０度の景色を見るといった、川を含めた空間が一つの生活空間になるような整備ができないか。
・平城、生駒いかるが圏域の川は江戸時代以来、専ら農業用水として活用してきた川だから親しむ川でも遊ぶ川でもない。きれいな流れとか、魚がたくさんいるところがあるとかという雰囲気の川が唯一残っているのが布留飛鳥圏域である。寺川の今里の浜は、奈良県では珍しい近世の遺跡。大和の国の人の暮らしと直結している場所でもあるので、もっとそれらしい雰囲気につくり直してもらったらどうか。
・飛鳥川に関しては、大和川では、人が集まって遊んで、あるいは観光客が鑑賞しに来る川として唯一残っている川ではないかと思う。できるだけ人工的なものを新たに加えるということは控えてほしい。専門家ではなく大きな情緒を持った人の意見を大いに入れていただきたい。
・保育園の横はきれいに整備されていたが、本当に親しむ川ではないと思った。もっと自然を生かしたままの川であってほしいと思う。
・奈良には川らしい川がほとんどないということが確認されたような感じ。三輪川などは、三輪山の近くだからかなりきれいな川だったに違いない。それが~~浄化施設が必要なほど汚れている。~~いまでは水質も悪く、見た目も汚い。~~汚いまま大阪へ流さないためにも貯留型の施設の整備も必要ではないか。~~こういう小さな支流がたくさんあって、汚い水が流れていって大和川から大阪湾にいく。海に負荷を与えているということを考えれば思い切った対策が必要ではないかと感じている。
・「総合的な治水」も大事だが、「総合的な川づくり」が必要では。
・飛鳥川の上流にはネコヤナギが咲いていた。ああいった根の強い植生を川の端に使ったら景観的にもよくなるし、非常に心も和むのでは。魚の側からみると、卵を産む場所とか子どもが育つ場所とか隠れる場所が必要。そして、できるだけ酸素が川の中に入るようにすることが必要。豆科のコマツナギもたくさんあった。こういった植生の研究もして植えていってもらいたい。

(3) その他
●今後のスケジュールについて
・事務局より今後のスケジュールについて提示した。